

# 中国における外来文化の受容と相克

## —— 「全国祝祭日休暇法」改定の背景

### The Recipience and Conflict of Foreign Cultures in China : The Background of the Recently Revised Act of the National Holidays

汪 婷\*

WANG Ting

#### Abstract

In December, 2007, the Revised Act of the National Holidays in China was published by the Government. This was a result of heated discussions about the slighted traditional holidays in the bustle of Western ones in many Chinese cities, which occurred on websites and in newspapers in the past two years. These discussions are a reflex of the problem on the recipience and conflict of foreign cultures brought in China in recent years. This paper shows the recent flow of those discussions and topics including exploration of young people's positive feelings to Western cultures.

キーワード：外来文化，伝統文化，受容，故宮のスタバ，祝日・休暇

Foreign Culture, Traditional Culture, Recipience,

Starbucks in Beijing Gugong, National Holiday

#### はじめに

2007年12月7日中国・国務院は「全国祝祭日休暇法」の改定を発表し、同法は2008年1月1日から施行されることになった。ポイントは伝統的な祝祭日をいくつか付け加えたことであり、そのために従来の三大連休期間に多少の修正を加えたことである(具体的な変更は本文中で示す)。この背景には「中国における外来文化の受容と相克」という問題があ

---

\*2007年度本学大学院修士課程修了生、一時帰国中、異文化コミュニケーション(Intercultural Communication)

り、この祝祭日改定は「外来文化の受容志向と伝統文化の相克」を巡って、ここ数年交された一連の議論の反映である。小論ではここに到った「外来文化の受容志向」の実際とここ数年中国の新聞やインターネット上で交された議論と話題・事例を取り上げ、「外来文化の受容と相克」という問題に対するいくばくかの示唆を与えたい。

ここで「いくばくかの示唆」というあまりはっきりしない表現をするのは、私が必ずしも「外来文化の積極的な受容志向」を悪いとも思っていないし、それがそのまま伝統文化と矛盾するとも思っていないからである。従って、この問題に関して、私は今日の現実から遊離することなく、また多くの若者の感性をも大事にして論を進めていきたいと思っていることを予め申し上げておきたい。

ここ十年ほどの急速な中国の経済発展は、多くの人々の生活を著しく変化させた。特に都市部の人々の生活は一変したといっても過言ではない。日常生活における外来文化の圧倒的な流入と生活の現代化志向は、否定しがたい。

例えば、12月に入ると都市部では、デパートやレストランなどがクリスマスツリーで飾られ、街は祭日の雰囲気包まれる。市民の間では、特に若者の間では、クリスマスカードやショートメールを交わしたり、バーで飲んだり、レストランで友人や家族と食事をしたりして、クリスマスを過ごすのが習慣になってきた。携帯電話でもクリスマス祝賀ショートメッセージが飛び交う。以前これらは、外資系企業の社員や留学経験者など一部の中国人の間でしか行われなかったものであるが、今ではクリスマスが大人や子供も、官僚も庶民も多くの人々が楽しむ祭日となっている。

クリスマス(聖誕節)をはじめ、この数年、バレンタインデー(情人節)、ハロウィン(万聖節)、エイプリル・フール・デー(愚人節)など、俗に言われる「洋節」(外国の祭日)を祝って過ごす人が増え続けている。街中はまさにお祭り気分となる。一方、伝統的な祭日が特に若者の間で軽視される傾向がある。ライフスタイルや食生活も同じである。いまの若者の間ではマクドナルド(麦当劳)やケンタッキー・フライドチキン(肯德基)、ピザハット(必胜客)など西洋のファーストフード店で誕生日を過ごすのは当たり前のこととなっている。

そんな中、インターネットのブログをはじめ、「中国は洋節に包囲されてしまい、自らの伝統が遠のきつつある。洋節から離れてこそ、自らの伝統文化を守ることができる」、「洋節をボイコットすべきだ」、「洋節とは一定の距離を保持すべきだ」などの批判的な声が聞かれるようになってきた。伝統的な文化より欧米の文化が主流になっていることを心配しているのである。こうしたことから、一部専門家は伝統的な文化を守ろうと、国内5大祭日である「春節」、「清明」、「端午」、「中秋」、「重陽」のすべて、あるいは大半を、単なる民間の祭日から国が休日に指定する祭日に格上げする立法化を提言してきた。しかし、本当にいまの若者は西洋の文化に憧れていて、母国の伝統的な文化を忘れているのであろうか。洋節を過ごすからといって、それがそのまま伝統的な祭日の放棄につながると言えるのだろうか。伝統文化と外来文化をどう調整・融合すればいいのであろうか。

発展している国はどこでも外来文化を受け入れている。従って、外来文化の受容そのものが問

題ではないのだが、外来文化の流入があまりに極端になると、伝統文化の軽視と衰退を招くことも事実である。一般に外来文化の受け入れには、受容、排除、変容、或いはまた、選択、併存、融合などが考えられるのだが、上記のような洋節批判が出てくるのは、それをどのような形で受け入れと考えたらよいか、困惑しているからだと思われるし、また、洋節が盛んな割には気持の上でどこか落着きがないからだと思われる。そのような迷いがここ数年の「外来文化と伝統文化」の議論につながっているのだと思われる。

## 1. 伝統文化の現状

現代文化の中に伝統文化をどう位置づけたらよいのか、中国は今なお模索中である。というより、経済発展の一定の段階にきてようやくそういう問題意識をもつようになったのだということもできる。「伝統文化の位置づけ」が問題だといえば、日本人の目には「それは日本と同じ」とみえるかも知れないが、中国ではむしろ日本を手本にすべきだという意見も出ている<sup>1)</sup>。こうした危機感を裏づけるアンケートがあるので、先ずそれを紹介しておきたい。

2005年1月5日、中国のサイト《新浪網（ネット）》上で「中国人よ、伝統文化に対するアイデンティティやいかに」というタイトルのアンケート調査が行われた<sup>2)</sup>。その趣旨は次のように説明されている。

張藝謀監督による8分間のオリンピック・デモビデオが外国で放映され<sup>3)</sup>、《英雄》(HERO)や《十面埋伏》(LOVERS)がその中国文化的要素ゆえ外国で賞をもらった。そのとき我々が知りたいと思うのは、中国人一人ひとりの心の中で、伝統文化がどのような役割を果たしているのかである。

この趣旨に沿ってアンケートでは以下の16の設問が並べられている。

1. 伝統文化は思想・観念だと思うか、それとも生活のスタイルか、もしくはその両方だと思いますか。
2. 中国の伝統的な仁義礼信忠孝廉恥を自分の道德規範にしたことがありますか。
3. 春節、清明節、中秋節など伝統的祝祭日の催しに喜んで参加しますか。
4. 普段自分から進んで伝統音楽や京劇・地方劇を鑑賞しに行きますか。
5. 盛大なパーティーでは唐服やチャイナドレスを着用するほうが効果的だと思いますか。
6. 「老子」「莊子」「詩経」など經史子集を読んだことがありますか。
7. 家に筆墨紙硯という文房四宝はありますか。

8. 『三国志』『紅樓夢』『水滸伝』などの古典文学が蔵書にありますか.
9. 琴棋書画などの伝統技術, たとえば書法, 国画, 民族楽器(二胡, 古箏など), カンフーなどに関心がありますか.
10. 「身を修め家を斉え国を治め天下を平たくす」とは古代読書人の理想である. それについてどう考えていますか.
11. 中医は伝統文化の重要な一要素である. 皆さんは中医をどのように見えていますか.
12. 社会での付き合いに際し, 「伝統」という尺度で相手を評価したことがありますか.
13. 伝統文化の現状に対し, どう思いますか.
14. 伝統文化は現在の中国社会にとって, どのような存在ですか.
15. 伝統文化の未来について, どう思いますか.
16. グローバル化が中国伝統文化に及ぼす影響についてどう思いますか.

現代社会における伝統文化保持の実態を問おうというこのアンケートには, 21 日間で 1 万 9827 人に上るネットユーザーが答えていた. ネットユーザーという点で考えれば回答者は圧倒的に若年層だと推察されることから, この反響の大きさは, 若年層がこの問題に対していかに関心を持っているか, もしくはこれがいかに社会的関心を集めている問題かを示していると言える.

この中から具体的な状況を知ることができる項目をいくつか取り上げると, 3. 伝統的な祝祭日に「喜んで参加する」が 57.51%, 「普通, みんながやるから」が 35.28%, 4. 自分から進んで京劇などを鑑賞することが「ない」のが 18.43%, 6. 「老子」「莊子」「詩経」などを「読んだことがない」のが 16.78%, 7. 自宅に文房四宝が「ある」のが 18.05%, 「一つもない」のが 34.02%, 9. 伝統的な芸術や芸事に「精通している」のが 1.67%, 「まるで分からない」のが 29.3%となっている.

これらをみると, (3. 4. はともかく, 全体としては) 中国人, 少なくとも若年層にとって, 伝統文化はもはや身近にあるのではなく, 遠い存在になってきているという厳しい状況をうかがわせるものになっている.

ところが, この結果を受けて各メディアは挙って「ネットユーザーの 7 割 伝統文化をアイデンティティと認める」という肯定的ニュアンスのニュースを流したのである. 中国の実情から見れば, この報道は各メディア個別の評なのではなく, 政府関係筋が発表した公式見解だと言ってよい. これは, 1. 伝統文化は思想・観念とライフスタイルの両面である (78.2%) と, 2. 仁義礼信忠孝廉恥を自分の道德規範としたことがある (69.24%) という 2 項目の数値だけを取り上げて「ネットユーザーの 7 割 伝統文化をアイデンティティと認める. 専門家評: 「消失論」はオーバーだ」<sup>4)</sup>という見出しが出ているのである. つまり, 政府の公式見解としては, 若者も伝統文化を重視していると思いたい, またそのように導

きたいという願望を表しているということだろう。

これは裏を返せば、このような取り上げ方自体、逆に政府としての危機感の大きさを物語っているともいうことができる。これは、中国・社会科学院社会研究所による『社会藍皮書(白書)』2005年版所収のアンケート「現代の若者と伝統文化」で、大学生の20%が伝統文化の勢力は依然強大であると答え、40%がまだ影響力はあると答えた結果を受けて、『中国青年報』が「青年の6割が伝統文化を信頼」<sup>5)</sup>という見出しをつけて報道していることと軌を一にしている。この記事では「京劇などの国粹文化を大学生の間で広めるという点に関しては確かに不十分である。こうした伝統文化に触れないで京劇を好きになるなどということはありません」という現実も指摘しているにも拘らず、青年に対する「伝統文化」の影響は依然大であると報道しているのである。こうした矛盾した報道のあり方からは、伝統文化を大きく位置づけたい政府の思惑と、その思惑とは乖離した人々の生活実態が見えてくる。

現今の若者には(私も含めて)あまり気づかれなかったことだが、遡って調べてみると、ここ数年、確かに公的な場で伝統文化の復権や「中華美德」の復興を意図した一連の動きがあったことも事実である。次にそれを見ていきたい。

## 2. 「中華美德」の復興

1920年代前半の「五四新文化運動」は「外来文化と伝統文化」という視点からみれば、間違いなく「反伝統」の文化運動だった。その「反伝統」を標榜した「五四新文化運動」80周年に当たる2004年は、皮肉にも逆に「文化的保守主義」が中国を席捲したのである。儒学者たちは中国の古典を学ぶべしという「読経運動」を主張、2004年9月には「グローバル化と中国文化」をテーマに中華文化促進会が主催した「2004文化サミットシンポジウム」の最終日に、著名な科学者・作家・芸術家・思想家・学者などが「甲申文化宣言」を発表<sup>6)</sup>、中華文化の高揚を掲げた。さらに、同じ9月には儒教の祖である孔子生誕2555年を記念して第1回「公祭」が山東省曲阜で、10月には中華民族の祖である炎帝を記念して炎帝陵祭祖「重陽甲申年諸大典」が湖南省株洲炎陵县でそれぞれ盛大に催され、海外からも多くの「炎黄子孫」が馳せ参じた。こうした流れはこの数年ずっと続いている。2004年には「2004中華大祖先祭祀」として催された黄帝の記念祭が「乙酉年公祭黄帝典礼」としてより盛大に行われ、2005年11月には第1回「中国伝統的武術節」が開催された<sup>7)</sup>。また2005年5月に中国人民大学は6年制の国学院を設立することを正式に発表し、6月には中国社会科学院世界宗教研究所に「儒教研究中心(センター)」が開設された<sup>8)</sup>。

こうした「中華十伝統」<sup>9)</sup>をその鍵とする一連の動きは突然起こったわけではない。すでに数年前から中国伝統思想に基づく「中華美德」の普及・推進が叫ばれ、書店に行けば

児童用に編集された拼音付き<sup>ピンイン</sup>CDの四書五経や、拼音付き現代風挿絵本の『女兒経』や『弟子規』が並んでいる。また2003年1月には国家主席江沢民(当時)の序が附された『中華伝統美德格言』が人民教育出版社から出版された。その中で副総理李嵐清(当時)は次のように述べている。

「現代化に直面し、世界に向き合い、未来に向かう中国の青少年には、中華民族の大いなる復興の現実への期待が托されている。だからこそ青少年に対し中華民族の伝統的美徳教育を大々的に展開しなければならないのだ。」

1年で650万部を超えるベストセラーとなるなど、「美德」という点においては早くから古典回帰の傾向はあった。しかし総体として成り立っている「伝統文化」から「美德」だけを切り取って一人歩きさせるのは不可能である。伝統文化全体の発揚に向かうのはむしろ当然の流れといえよう。

2004年9月中国共産党第16期4中全会で出された<中共中央の党の執政能力強化に関する決定>の実施説明には「文化が多文化し各種の思想や文化がしのぎを削る中にあって、本土文化をいかに大きくいかに強くして民族文化を守り、西洋の腐った文化による侵食を食い止めるかということも、文化建設の重要な任務である」<sup>10)</sup>という項目がある。また2005年3月の全国政治協商会議では「伝統的祝祭日は伝統文化の結晶であり、これを維持することは中華民族であるという文化的立場の確認に必要である。民族的祝祭日は民族の文化的アイデンティティにとって重要な儀式でありまた要<sup>かなめ</sup>でもある。従って、伝統的祝祭日は民族文化を建設し民族精神を養成する上で不可欠な資源であり、基礎でもある」という理由で五大伝統的祝祭日を全国法定休日に組み込む提案がなされ<sup>11)</sup>、各界の委員40名が連名でこれに賛同している。2005年4月から7月にかけて台湾国民党党首連戦、台湾新党の党首郁慕明、親民党の党首宋楚瑜が相次いで初の訪中を果たしているが、その際それぞれが「中華民族」もしくは「炎黄子孫」をキーワードとして大陸との紐帯を強調したことから窺われるように、全世界に広がった華人のネットワークや台湾問題を処理するための中華アイデンティティの構築によって、民族の共通遺産である伝統文化の存在は必要不可欠である。前章1.で挙げたアンケートはこうした時代背景の中で行われたものである<sup>12)</sup>。

前章1のアンケートの結果に対する各種メディアの論評やこの章であげた事例から分かることは、一方で次々に外来文化の流入があり、また外来文化に対する積極的な受容がみられるとともに、伝統的文化の衰退に対する問題意識が、政府にも民間にもあるということである。それは若者にもあるのだが、その問題意識と現実の間には乖離があることも分かるのである。そこで次に、その相克の一つの例を最近の話題の中から取り上げてみたい。

### 3. 「故宮のスタバ」からみた外来文化への抵抗

2007年7月14日付の『産経新聞』に、北京故宮で営業していた「スターバックス（星巴克）」について次のような記事があった。

#### 故宮博物院、スタバと契約打ち切り

北京市の世界遺産、故宮博物院敷地内で営業している米コーヒーチェーン店スターバックスは外来文化の中国文化侵食ではないかとのインターネット上の批判を受け、故宮博物院側は、8年続いていたスターバックスとの契約を打ち切ることで合意した。14日付新京報が報じた。故宮のスターバックスは13日営業を停止。今後、故宮内で販売される飲食品、みやげものは「故宮ブランド」に統一されることになるという。故宮のスターバックスについては、国営中国中央テレビの人気キャスターがブログなどで「文化侵略」と批判、一大論争になっていた。（北京・福島香織）

明・清代の皇帝が暮らしていた北京の故宮。現在は博物館として一般公開されている歴史遺産内に、米大手コーヒーチェーン店スターバックスが進出して6年が経って、とうとう撤退することになった。これは中国現地でさまざまな議論が繰り広げられていったことによる。

発端となったのは、2007年1月12日、中央電視台（CCTV）の人気キャスターが自らのブログで「視覚汚染だ」「これはグローバル化ではなく中国文化への侵食」「故宮内のスターバックスは撤退すべき」との抗議文を掲載したことによる。瞬く間に50万のアクセスがあり、アクセス数は最終的に数十万件に上り、幅広いネットユーザーの反響を呼んでいった<sup>13)</sup>。「故宮のスターバックスは現代商業ウィルス」などの非難がネットで広がった。この現象について18日、党中央機関紙『人民日報』をはじめ、各紙、テレビメディアも大きく報じた。

同氏ブログ内では、「故宮は中国数千年の輝かしい文化の集大成であり、中国の象徴でもある場所だ。その中に店舗を構えるのは、中国の伝統文化を踏みにじる行為」という意見などが現れた。アクセス数は急速に増加して、多くのネットユーザーから支持を受けていった。また、西欧諸国でも「故宮内スターバックスがあるのはおかしい」と考える著名人もあったようで、中国文化を尊重しない行為と認識しているという指摘もあった。キャスターはその後、スターバックスの責任者に対し、「スターバックスが自ら撤退の道を選択すれば、国内売上が増加するのみならず、中国人民からも尊敬されるであろう」との内容を記した文書を送った。



しかしこの撤退問題については、賛成のほかに、反対の意見もあったことを指摘しておかなければならない。そもそも故宮側から出店を望んだ経緯がありブログ上では「スターバックスばかりを責めるのは不公平」「正規の契約を結んで営業している店にネット世論で撤退を迫るのはおかしい」<sup>14)</sup>などの意見もあった。さらに、「文化破壊、視覚汚染というなら世界遺産や中国の景勝地区にある共産党指導者揮毫の『天下第一』の看板の方が罪深い」<sup>15)</sup>との指摘もあった。

中国人はもともと万里の長城にジェットコースターを作ったり、歴史的景勝地を三峡ダムに沈めることにもさほど抵抗がなかった。それにも拘らず急に、故宮のスターバックスの是非がクローズアップされることになったのは、外国商業主義による景観や伝統文化破壊といった理由からだけではなさそうだ。

政府は2006年から文化統制政策を強化している。同年9月、国家文化発展計画綱要を発表し、そこで小学生からの伝統文化教育の強化や放送・メディアでの外来語・外国文字使用の禁止、コンテンツ産業の国産化を盛り込み、外来文化の中国進出に対する強い警戒感を示している。科学技術庁や国務院発展研究センターは同年から外資牽引型経済のもろさと国内産業保護を訴え始め、メディア、ネット上で「洋名牌(外国ブランド)批判」が盛んとなっていった。この傾向はブランドとは縁のない低所得層の支持まで得て広まっている<sup>16)</sup>。2007年に入って「故宮のスタバ」が問題になったのは、このような一連の流れを受けてのものではなかったのではないだろうか。

全国で現在約200店、この後2008年までに計約300店の展開を計画するなど中国で大成功を収めているスターバックスは、批判勢力にとって中国文化を侵食する外国文化、外国ブランド、外資の象徴に映る。「星巴族」(スタバ族)という言葉まで生み、コーヒー文化を浸透させたスターバックスは、中国伝統のお茶を楽しむ「茶館」文化を追い越したようにも感じられる。

唯、今回のような論争は、以前にもないではなかった。2000年の南京・孔子廟のマクドナルド、2003年の北京・北海公園内のケンタッキー・フライドチキン(撤退済み)などである。しかし当時、それを声高に叫んだのは中国好きの外国人と一部の中国知識人ぐらいだった。「故宮の星巴克」問題が国営メディアも巻き込んだ大論争に発展したのは、中国当局の文化統制政策を多分に反映しているのではないであろうか。

従って、かなりチグハグはあるのだが、このようにある外来文化が一定限度に達すると、外来文化と伝統的文化の相克が意識され、非難を避けがたくなるのだと思われる。

#### 4. クリスマスと中国の伝統的な祝祭日

「故宮のスタバ」論争は外来文化と伝統文化のごく最近の相克の例であるが、それとほ



ほぼ同じ時期に、「クリスマス」についても同じことが生じており、洋節に関する論争が遂に「祝祭日休暇法」の改定にまで及び、その改定によって2008年の祝祭日連休が決まることになったのである。ここでその経緯を振り返っておきたい。

「故宮のスタバ」論争は、2007年1月12日の人気キャスターのブログから始まったのだが、そのほんの2週間前の前年2006年の「クリスマス」は、日本と変わらないぐらい賑やかで多くの都市がクリスマスムード一色に包まれた。一ヶ月前からショッピングセンターや学校、各機関などの入口やホール、また個人の家においてさえもさまざまに工夫を凝らしたクリスマスツリーが続々と登場。各大学ではさまざまなイベントが目白押しだった。街中の店の至るところで窓に貼られた「サンタのおじさん」が微笑みかけ、ファーストフード店から流れてくるのはジングルベルであった。

その様子を見て、中国の伝統的な祝祭日、春節・端午節・中秋節・重陽節などに対して関心が薄い若者がクリスマスとなるとこんなに熱心になる中国の状況を憂えた人達がいた。北京大、清華大など名門大学の哲学、教育学の博士たち10人が連名で声明を出し「中国国民を覚醒させ、西洋文化の拡大に抵抗しよう」と呼びかけた。ネット上でも「考えもなく西洋文化に漂い出るのではなく、中国文化の主体性を確立しよう」と呼びかけた<sup>17)</sup>。これに対して若者の反響も大きく、「なぜ中国と西洋文化を対立させなければならないのか、二つは融合できないのか」などの意見も出された。

その後、『中国青年報』とQQ.comが合同で「西洋の祭日を受け入れるか？」というアンケート調査を行った。その調査結果によると1万人余りの調査協力者のうち29%の人がクリスマスのような祭日を受け入れる理由としてロマンチックな魅力を、27.6%の人が営業上の理由を上げており、また22.4%の人は群集心理によるものと認めている。西洋文化あるいは宗教的な理由を本当に理解し、これを認めた上で受け入れる人は10分の1程度に過ぎなかった<sup>18)</sup>。

このアンケート調査の結果から見れば、クリスマスの本当の意味を理解している中国人は少なく、みんなこの日を利用して楽しく過ごしたいだけだということが分かる。そんなに「緊張」する必要はない。中国人は宗教的な祝日を過ごしているのではなく、一種の雰囲気を楽しんで味わっているに過ぎないのである。

しかし、伝統文化より西洋文化が祝祭日休暇を主導していると心配する声に応えて、中国政府は伝統的祝祭日を重視して、「国家法定節假日(祝祭日)調整法」の試案を発表するまでになった。そしてこの試案に対するアンケート調査を行うことになり、アンケートは注目のうちに2007年11月15日に終了した。結果はインターネット利用者(約155万人)の約8割がこの試案を支持した<sup>19)</sup>。それに基づいて国务院の温家宝総理は12月7日、自らが議長を務めて国务院常務委員会を開き、『全国祝祭日休暇法』の改定に関する国务院決定(草案)」と「従業員年次有給休暇条例」を審議の上可決したのである。2法案はさらなる

改良を加えて、国務院によって公布・実施されることになった<sup>20)</sup>。

「祝祭日休暇法改定」草案で注目すべき主なポイントは次の6つである<sup>21)</sup>。

- (1) 新年の休暇は元旦の1日でこれまでと変わらない。
- (2) 旧正月休みは3日と変わらないが、開始日が旧正月1日から大みそかに変更。
- (3) 5月の労働節休暇は3日から1日に削減。
- (4) 10月の国慶節連休の3日は変わらない。
- (5) 清明節・端午節・中秋節の伝統的祝日が新たに法定祝日として設けられそれぞれ1日ずつ休みとなる。
- (6) 週末の休みを祝日前後に移動させ、法定祝日とあわせて連休とすることは認める。

これに伴って国務院弁公庁が12月19日、2008年の祝祭日に伴う連休を発表した。元旦(1月1日)、春節(旧正月、2月7日～8日)、清明節(4月4日)、労働節(メーデー、5月1日)、端午節(6月8日)、中秋節(9月14日)、国慶節(10月1日～3日)の連休は次の通り<sup>22)</sup>。

元 旦： 07年12月30日～08年1月1日の計3日間  
 春 節： 2月6日～12日(旧暦のおおみそかから正月6日まで)の計7日間  
 清明節： 4月4日～6日の計3日間  
 労働節： 5月1日～3日の計3日間  
 端午節： 6月7日～9日の計3日間  
 中秋節： 9月13日～15日の計3日間  
 国慶節： 9月29日～10月5日の計7日間

上記(3)で「労働節休暇は3日から1日に削減」とあるのに、労働節連休が「5月1日～3日の計3日間」となっているのは、「5月1日は労働節で休み、5月2日(金)は5月4日(日)を振替え出勤にして休みにする。5月3日(土)は休み」<sup>23)</sup>ということによる。他も同じ考えによるもので、例えば元旦も「1月1日(火)は法定の休日で、12月30日が日曜日なので12月29日(土)の休みを12月31日(月)に移動させて、3日間の連休とした。よって12月29日(土)は振替え出勤」<sup>24)</sup>として、3日間の連休を設けたのである。上記の連休期間はどのように本来の祝日に、土、日、振替え休日、振替え出勤を勘案して設定されたものである。

以上の全体をみれば、従来の(日本とよく似た)ゴールデン・ウィークがなくなったこと

になり、伝統的祝日である清明節・端午節・中秋節を法定祝日とするために、従来のゴールデン・ウィークから休日を削ったことになる。そして、この「全国祝祭日休暇法」は実際に 2008 年から(正確にいうと 2007 年 12 月 30 日から)実施されている<sup>25)</sup>。

このようにしてクリスマスがきっかけとなって、2008 年からこれまで軽視されがちだった伝統的祝祭日も休暇日に加えることによって、伝統文化の復興を図ることになったのである。勿論、クリスマスに代表される西洋の祝祭日も、元の意味を離れて賑わっていることに変わりはない。つまり、このような措置は一見対立しそうに思われる外来文化と伝統文化の調整・融合だと言うことができるのである。3.で述べたことが外来文化と伝統文化の相克の例だとすれば、この章(4.)で述べたことは外来文化と伝統文化の調整・融合の例だと言うことができるだろう。

## おわりに

これまでの話の流れからうまく挿入できなかった話題もある。それはクリスマスに代表される洋節の楽しさや賑やかさはどのようにして導入されたのだろうかという問題である。必ずしも「改革開放」によって洋節が自然に流入して、人々の心を掴まえたという訳でもなさそうなのである。

日本の「イトーヨーカ堂」が中国でチェーンストアを全国に展開しているのは、「1996 年に中国国務院によって外資系小売業として世界ではじめてチェーンストアの中国全国展開が許可された」<sup>26)</sup>ことによる(中国政府じきじきの全国展開の許認可は、現在でもイトーヨーカ堂とオランダの流通チェーンだけである)。北京市内だけでも「華堂商場」という名前でハトのマークの看板と共に現在 7 店舗を構えて、賑わっている。その認可の際に三つの条件があったのだという。① ポストシステムを導入した単品管理のできる店、② 中流階級向けの品揃えとサービスの店、③ 欧米や日本の社会行事(クリスマスやバレンタインデーなど)を行うこと<sup>27)</sup>、である。

勿論、「イトーヨーカ堂」はそれを忠実に守っている訳だが、最初の発想はあくまで中国政府だったのである。つまり、政府は中国でも日本や欧米のように後に洋節といわれるようになった西洋の祭日を賑々しく展開してほしかったのである。それは成功した。成功し過ぎて、中国本来の伝統行事がおろそかにされているように感じられるようになったのだろろうと思われる。民間で生じた洋節に対する疑問とタイミングをうまく捉えて「全国祝祭日休暇法」の改定につなげた、というのが、祝祭日に関する流れであるように思われる。

それはそれとして、洋節が既に定着したことを前提にして、若者の心理面からも考えて

みたい。

本当にいまの若者は西洋文化に憧れていて、母国の伝統文化を忘れているのであろうか。これは、現今の若者の生活様式にも深く関わっているのではないか。今の中国の若者も決して祖国の伝統文化を否定したり捨てている訳ではない。気持の上では伝統文化を大切にしなければならないと思っているのである。ただその気持ちの表し方が変わってきているのだと思う。その一方で、クリスマスに関する商品や食べ物がすごく豊かで、クリスマスにお祝いやプレゼントをやり取りするのは、キリスト教に対する関心というよりも、クリスマスという名で、買い物をしたり、美味しいものを食べたり、いわゆる「消費」、「娯楽」、「一種の雰囲気を楽しむ」のためである。決して精神文化のレベルの問題になっている訳ではない。そういう意味で、私たち若者からすると、中国国内での反応はやや「緊張」のしすぎと言えるのである。国民の伝統文化の意識を呼び覚ますのに、外来文化をボイコットしてもその目的を達することはできないであろう。多元的な世界の中、異なる文化の排除や遮断ではなく、競争や融合、改革を通して受け入れさせ、選択させることが必要であると思う。それこそが文化を発展させる道である。

しかし、伝統文化の衰退もある程度進んでいることは認めなければならない。その際、若者は伝統文化に無頓着だというのが、年配者も外来文化に関心を示しても、伝統文化には決して熱心ではないというのが現状であり、この問題は決して世代間の問題ではないと思う。年配者も経済発展を急ぐ余り、伝統文化に対して関心を払っている間がなかったのである。

それでは、伝統文化への関心を喚起するにはどうすればよいか。伝統文化への無関心の増大には、国民に対する教育にも責任がある。中国の教育は長い間伝統文化、精神教育を軽視し、実利のみを求め経済発展に役だてることにのみ重点をおいてきた。学生の心を豊かにするような教育は、先生個人の人格による個人的影響を別にすれば、これまでなかったといってよい。必要なことは、伝統文化教育に力を入れることと、現代の新しい雰囲気にあった中国自身の文化を建設することである。異なる文化と相互に交流し、その刺激を媒介にして、現代に合った文化を伝統文化の上に建設することである、と思われるが、小論の目的はそのような提言をすることではないので、これ以上は触れない。小論の目的はあくまで「外来文化の受容と相克」に関して、私たち若い世代が既に何気なく受け入れている今日の外来文化と伝統文化の関係、それも思想的なレベルではなくできるだけ生活レベルでの関係にあり、且つまた私たち若い世代の感性を偽ることなく、ここ数年の話題と流れを明らかにすることであつた。既にみてきたように「外来文化の受容」には対立・抵抗・矛盾があると同時に、選択・併存・融合(調整)もあり、それらの試行錯誤が生活の豊かさにつながる事が大事なことと思われる<sup>28)</sup>。

## 註

- 1) 《新浪網》(<http://cul.sina.com.cn/>, 2006 年 11 月 5 日所見)が 2004 年 7 月に組んだ特集「今日の話題: 伝統文化よ, 我らはお前を失いつつあるのだろうか」のなかでは, 文化財保護の視点から日本がいかに伝統文化の継承と保護に熱心であるかを述べ, 中国人のように崇拜か排除かといった極端な態度ではなく, 現代化と伝統を対立する二項と捉えていない点を賞賛している. 尚, 本文でも以下の註でも, 原・中国文の日本語訳はすべて筆者の訳である
- 2) 《新浪網》で調査が行われており, 結果も報告されている.  
<http://cul.sina.com.cn/c/2005-01-05/104230.html> (2006 年 11 月 5 日所見).
- 3) アテネオリンピックの閉会式で映画監督 張 芸謀の演出による北京オリンピックのデモンストレーションが行われた. また《英雄》も《十面埋伏》も同じ張芸謀監督作品である. 張芸謀監督は中国風を演出することに長けており, 特に海外での評価は高い. 2004 年のニューヨーク映画批判家協会賞において, 《十面埋伏》が最優秀外国語映画賞を, 《英雄》が最優秀撮影賞をそれぞれ受賞している.
- 4) 《新華網》; <http://news.sinhuanet.com/newmedia/2005-02-27/content-2623962.htm> (2006 年 11 月 8 日所見).
- 5) 『中国青年報』2005 年 9 月 29 日.  
(《中青網》; <http://cyc7cycnet.com8090/cyenews/index>, 2007 年 1 月 8 日所見)
- 6) 言語学者許嘉璐, 科学者楊振寧, 国学者季羨林, 哲学者任繼愈, 文学者王蒙など錚々たるメンバーが発起人として署名している.  
(《新華網》; <http://news.sinhuanet.com/newmedia>, 2007 年 1 月 8 日所見)
- 7) 2004 年鄭州「第 1 回国際伝統武術節」を引き続く形で, 2005 年 11 月 20 日から 22 日までの 3 日間雲南省開遠市で举行された.  
(《新華網》; <http://news.sinhuanet.com/newmedia>, 2007 年 1 月 8 日所見)
- 8) 《光明網》; <http://www.gmw.cn/content/2006-03/09/content-192675.htm>. (2007 年 10 月 16 日所見)
- 9) 具体的に言えば, 「一是仁愛孝悌, 二是謙和好礼, 三是誠信知報, 四是精忠愛國, 五是克己奉公, 六是修己慎獨, 七是見利思義, 八是勤儉廉政, 九是篤實忠厚, 十是勇毅力行」である. これは小学校のとき覚えるもので簡単に縮めて「仁義謙誠忠厚公勤慎勇」ともいう.
- 10) <中共中央の党の執政能力強化に関する決定> 學習回答「党務資訊」の 41「なぜ国政情勢と国際事務処理に対応する能力をレベルアップし続けなければならないのか?」  
(《党建網》; <http://www.tidjw.cn/system/2005/10/18/000048698.htm>, 2007 年 1 月 9 日所見)
- 11) 発言は李漢秋委員による「五大伝統的祭日を全国法定休日に組み込むべきだ」.  
(《光明網》; <http://www.gmw.cn/content/2006-03/09/content-192675.htm>, 2007 年 10 月 16 日所見)
- 12) 同前
- 13) 『新京報』(Beijing News)2007 年 1 月 17 日.
- 14) 『ENGLISH EXPRESS』2007 年 7 月号, 朝日出版社.
- 15) 同前.
- 16) 「外来文化の侵食警戒」(《YAHOO! JAPAN》; <http://www.yahoo.co.jp>, 2007 年 11 月 8 日所見)
- 17) 「口実つけて“メリークリスマス”」  
(《北京週報網》; <http://www.pekinshuho.com/yzds/txt/2007-12/24/content-92142.htm> ,

2008年1月3日所見)

- 18) 同前.
- 19) 同前.
- 20) 『京華報』 2007年12月8日.
- 21) 『人民網日本語版』 2007年12月9日(2008年1月3日所見).
- 22) 「国務院弁公庁, 来年の祝祭日の連休を発表」(『人民網日本語版』 2007年12月19日).
- 23) 《エクспロア中国》; <http://www2.explore.ne.jp/feature/fdjr.html> (2008年10月24日所見).
- 24) 同前.
- 25) 小論の趣旨とは直接の関係はないが, 折角中国の祝日・休日について述べたので, ここで述べた公定 休日以外に, ある一部の国民にとっての休日というのがあることも述べておきたい. 次の通りである.  
    婦人節: 3月8日 …… 女性従業員が半日の休み  
    青年節: 5月4日 …… 14歳以上の青年が半日の休み  
    児童節: 6月1日 …… 14歳未満の児童が半日の休み  
    中国人民解放軍記念日: 8月1日 …… 軍人が半日の休み
- 26) 『週刊文春』2008年1月31日号.
- 27) 同前.
- 28) 本稿は修士論文の一部を発表用にまとめ直したものであるが, 修士論文のときも今回の発表に際しても, 日本語の修正等について指導教員的小林路義教授(現名誉教授)のお世話になった. 記して謝意に代えたい.